The Human Science Research Bulletin
2010, No. 9, 115-127

Erikson のパーソナリティ構成要素と性格特性，エゴグラムとの関連性

―― EPCS と YG 性格検査，TEG II との確認的因子分析による ――

心理学部発達教育心理学科　藤村和久

抄録：本研究は，EPCS（Erikson's Personality Component Scale；藤村，2008，2009）の各尺度が，Erikson が定義した心理・社会的特徴を持つことを証明することを目的とする。そのために，EPCS の 6 尺度と YG 性格検査 12 尺度，TEG II（東大式エゴグラム）との因子構造的な関連性を求め，EPCS の各尺度の人格機能的な性質を確認した。その結果，EPCS の各尺度は Erikson の心理・社会的性質を測定する尺度であり，構成概念妥当性を有することが明らかになった。

キーワード：エリクソン，パーソナリティ，エゴグラム，YG 性格検査，構造方程式モデリング

【問　題】

藤村（2004，2008，2009）は，Erikson (1959) の漸成発達図式における基本的信頼感から親密性の心理・社会的危機における経験が内在化されたパーソナリティの構成要素として尺度化を行い，EPCS (Erikson's Personality Component Scale) と名付けた。

構成された尺度の測定内容はそれぞれ次の通りである。基本的信頼感尺度は，「自己自身への信頼感」「他者から受け入れられているという社会的信頼感」「自己の人生への信頼感」をといった自己および自己が存在する世界への信頼感を測定する尺度である。自律性尺度は自己の人生や社会での適応過程において，物事の認識，判断，行動を自律的に行い，それらに対する心理的なゆるぎなさの自己感を測定する尺度である。自主性尺度は，社会的な場面での積極的，主体的な行動傾向から認識される自己感の尺度である。生産性尺度は，勉強や仕事，物事に取り組む持続的な忍耐と努力を傾注することができ，それを達成したときの喜びの経験等の自己感を表す尺度である。同一性尺度は，自己の斉一性，一貫性を維持し，自己受容的な自己感を表わす尺度である。親密性尺度は，対人関係の過程で生じる様々な変化にも自己を見失うことなく，自我の傷つきなどへの不安がなく人と親密な関係を築き，維持することができるといった自己感を表す。

これらの尺度が Erikson により定義された心理・社会的特徴を持つことを確認するには，多特性－多方法（Campbell & Fiske, 1959）的な方法による分析が 1 つの方法として考えられる。しかし，Erikson の基本的信頼感から親密性の測定尺度は，Rasmussen (1964)，Rosenthal, et al. (1981) の尺度がそれぞれ日本語訳されているものの（宮下，1987；中西・佐方，1983），尺度構成上の資料が十分でないため（藤村，2008），これらの尺度との分析は表面的な相関の評価に留まらざるを得ず，個々のパーソナリティ要素の機能を知るには信頼性の乏しいものにならざるを得ない。したがって，本研究では，EPCS と性格特性，および自我状態の測定尺度のエゴグラムとの関連性から EPCS の

人格的機能を明らかにすることによって，測定内容の妥当性を検証することを目的とするのである。

藤村（2008）は，構成されたEPCSとBig Five性格特性（和田，1996）との関連性を検討した結果，①EPCSの基本的信頼感，自律性，自主性とBig Fiveの開放性，外向性，非調和性からなる因子，②EPCSの基本的信頼感，自律性，同一性，Big Fiveの情緒安定性，調和性からなる因子，③EPCSの親密性，Big Fiveの調和性，外向性からなる因子，④EPCSの生産性，Big Fiveの誠実性からなる因子を明らかにした。EPCSは内的には各要素間の相関性が高く1次元的であるが，個々の要素の個人のパーソナリティ内における人格的機能は心理・社会的危機における経験の内在化の在り方が他のパーソナリティ要因との結びつき方によってことなることが明らかになった。たとえば，自律性の人格的機能が自己の外界との調整機能を伴わない機能のあり方のパーソナリティと，人間関係や環境に協調的，調和的に機能するパーソナリティが存在することが明らかになった。Big Five性格特性は2次因子水準の高次な特性であり，EPCSとの関係性も必然的に抽象度の高いものにならざるを得ない。EPCSはErikson（1959）がいう自我感の現れとしての行動傾向を捉えようとした尺度であり，Eysenck（1969）の習慣的反応水準になるよう項目作成されている。したがって，EPCS各尺度による人格的機能を検討するには同水準の尺度による性格特性尺度を用いる必要があると考える。

上記の理由から，本研究では習慣的反応水準の行動を捉えるべく尺度構成されているYG性格検査の12特性との関連性を検討する。YG性格検査は周知のように開発以来広く用いられてきた性格検査であり，12特性間の内的構造も安定していて各尺度の心理学的内容が明確になっている検査である（辻岡・藤村，1975a，1975b，1975c，1976，1983，1996）ことからマーカー・バリアブル（marker variable）として適切な検査と考える。

次に，臨床現場，教育界，産業等の分野において広く用いられているエゴグラムとの関連性について検討する。エゴグラムは，Dusay（1977）により自我状態を量的に表現するために考案されたものである。その定義によれば，「エゴグラムはそれぞれのパーソナリティの各部分同士の関係と，外部に放出しているエネルギーの量を棒グラフで示したものである」。質問紙法エゴグラムはHeyer（1979）により開発された。日本では杉田（1974），岩田（1977）がそれぞれ質問紙法エゴグラムを開発し，その後幾種類もの質問紙エゴグラムが作成された。本研究では，東京大学医学部心療内科TEG研究グループによる新版東大式質問紙法エゴグラム（TEG II）を使用する。

エゴグラムでいう自我状態とは思考，感情，行動パターンを包括したものであり，「親の自我状態」「成人の自我状態」「子どもの自我状態」に分類され，親はさらに「批判的な親」，「養育的な親」，子どもは「自由な子ども」および「順応したこども」に分けられる。

東京大学医学部心療内科TEG研究会（2006）にしたがって5つの自我状態尺度について記述する。

批判的な親の自我状態とは，自分の価値判断を正しいものとして譲らず，目標が高く，理想を追求し，自分に厳しく，責任感が強く，リーダーシップを発揮する反面他人に厳しく，自分の言い分を通すといった特徴を示す。

養育的な親の自我状態とは，他人をいたわり，親身になって世話をするといった親切で，寛容的な態度や行動を示す。他人の喜びを自分のことのように喜び，人の気持ちがよくわかり，共感的な特徴を示す。

成人の自我状態とは，事実に基づき，物事を客観的，論理的に理解し，判断するといった特徴を示す。

自由な子どもの自我状態は，感情や欲求を自由に表現する，本能的，自己中心的で，基本的には自己肯定的な特徴を示す。

順応した子どもの自我状態は，従順で，他人に

依存し，感化されやすい反面，周囲に合わせようとし過ぎて主体性に欠け，基本的には自己否定的な構えを有するといった特徴を示す。

以上のエゴグラムに現れる5つの自我状態とEPCSの基本的信頼感から親密性の6つの自我感との関連性を検討する。

【方　法】

調　査

被験者は私立K大学学生152名（男性49名，女性103名）にEPCS, YG性格検査およびTEGⅡによる調査を実施した。YG性格検査は授業中に実施し，EPCS調査用紙とTEGⅡ検査用紙は授業中に配布し，次回授業時に回収した。

分　析

1. EPCSとYG性格検査

(1) EPCS 6尺度とYG性格検査12尺度の計18尺度間の相関行列の固有値のスクリーグラフより，因子数を6とした。

(2) 探索的因子分析等で因子構造を検討し，最終的にSEM（structural equation modeling）により因子構造を確認した。

2. EPCSとTEGⅡの分析

(1) EPCS 6尺度とTEGⅡ5尺度の計11尺度間の相関行列の固有値のスクリーグラフより，因子数を4とした。

(2) 探索的因子分析により両尺度間に機能する因子を検討し，最終的にSEMにより因子構造を確認した。

【結　果】

1. EPCSとYG性格検査との関連性

EPCSとYG 12特性との相関係数は表1のとおりである。

相関行列を概観すると，①基本的信頼感はYG

表1　EPCSとYG性格検査12特性との相関行列

	基本的信頼感	自律性	自主性	生産性	同一性	親密性	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
基本的信頼感	1.00	0.43	0.50	0.38	0.62	0.63	-0.51	-0.31	-0.48	-0.41	-0.33	-0.57	0.08	0.52	0.28	0.25	0.38	0.47
自律性	0.43	1.00	0.57	0.29	0.56	0.22	-0.42	-0.43	-0.75	-0.52	-0.26	-0.30	0.11	0.41	0.16	0.24	0.36	0.34
自主性	0.50	0.57	1.00	0.43	0.46	0.42	-0.36	-0.25	-0.58	-0.42	-0.22	-0.34	0.33	0.58	0.36	0.15	0.74	0.69
生産性	0.38	0.29	0.43	1.00	0.36	0.29	-0.18	-0.16	-0.24	-0.05	-0.10	-0.25	0.26	0.31	-0.01	-0.22	0.33	0.33
同一性	0.62	0.56	0.46	0.36	1.00	0.52	-0.54	-0.35	-0.56	-0.47	-0.39	-0.45	-0.06	0.34	0.06	0.29	0.24	0.30
親密性	0.63	0.22	0.42	0.29	0.52	1.00	-0.51	-0.20	-0.29	-0.36	-0.41	-0.66	-0.02	0.35	0.24	0.33	0.34	0.42
抑うつ性(D)	-0.51	-0.42	-0.36	-0.18	-0.54	-0.51	1.00	0.50	0.61	0.62	0.61	0.54	0.06	-0.34	-0.21	-0.48	-0.26	-0.42
回帰性(C)	-0.31	-0.43	-0.25	-0.16	-0.35	-0.20	0.51	1.00	0.55	0.58	0.37	0.39	0.28	-0.26	0.12	-0.17	-0.13	-0.14
劣等感(I)	-0.48	-0.75	-0.58	-0.24	-0.56	-0.29	0.61	0.55	1.00	0.73	0.48	0.47	-0.03	-0.44	-0.16	-0.32	-0.44	-0.43
神経質(N)	-0.41	-0.52	-0.42	-0.05	-0.47	-0.36	0.62	0.58	0.73	1.00	0.46	0.54	0.20	-0.36	-0.16	-0.50	-0.28	-0.35
主観性(O)	-0.33	-0.26	-0.22	-0.10	-0.39	-0.41	0.61	0.37	0.48	0.46	1.00	0.54	0.15	-0.15	-0.04	-0.23	-0.16	-0.24
非協調性(Co)	-0.57	-0.30	-0.34	-0.25	-0.45	-0.66	0.54	0.39	0.47	0.54	0.54	1.00	0.19	-0.28	-0.08	-0.29	-0.33	-0.31
攻撃性(Ag)	0.08	0.11	0.33	0.26	-0.06	-0.02	0.06	0.28	-0.03	0.20	0.15	0.19	1.00	0.22	0.40	-0.08	0.37	0.35
一般的活動性(G)	0.52	0.41	0.58	0.31	0.34	0.35	-0.34	-0.26	-0.44	-0.36	-0.15	-0.28	0.22	1.00	0.49	0.22	0.52	0.63
のんきさ(R)	0.28	0.16	0.36	-0.01	0.06	0.24	-0.24	0.12	-0.16	-0.16	-0.04	-0.08	0.40	0.49	1.00	0.39	0.33	0.57
思考的外向性(T)	0.25	0.24	0.15	-0.22	0.29	0.33	-0.48	-0.17	-0.32	-0.50	-0.23	-0.29	-0.08	0.22	0.39	1.00	0.05	0.27
支配性(A)	0.38	0.36	0.74	0.33	0.24	0.34	-0.26	-0.13	-0.44	-0.28	-0.16	-0.33	0.37	0.52	0.33	0.05	1.00	0.73
社会的外向性(S)	0.47	0.34	0.69	0.33	0.30	0.42	-0.42	-0.14	-0.43	-0.35	-0.24	-0.31	0.35	0.63	0.57	0.27	0.73	1.00

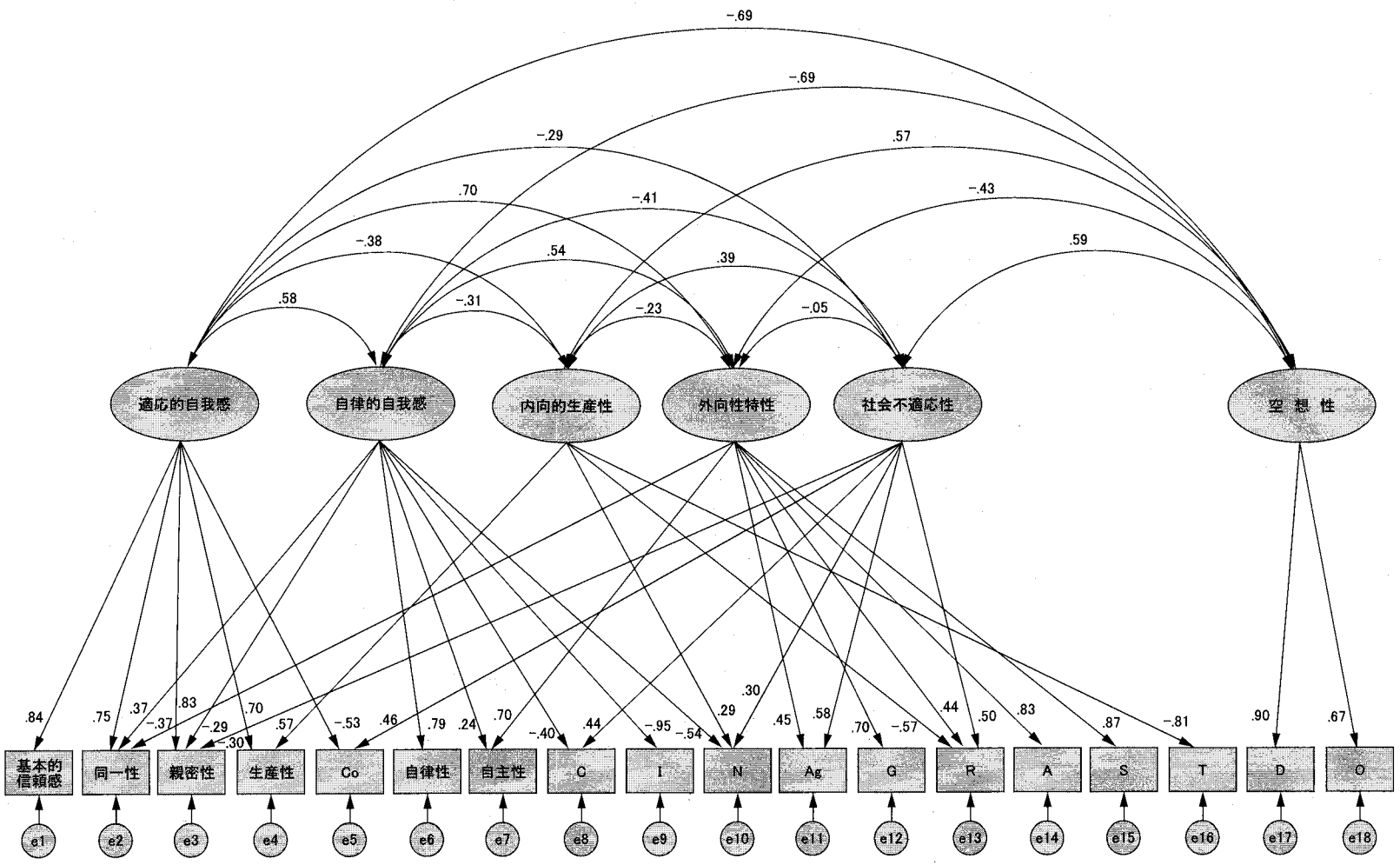

図1　EPCS と YG 性格検査との構造的関係

表2　EPCSとYG性格検査12尺度との確認的因子分析結果（標準化推定値）

		適応的自我感	独自的自我感	内省的生産性	外向的特　性	社会不適応性	空想性
	基本的信頼感	0.840					
E	自　律　性		0.785				
P	自　主　性		0.239		0.695		
C	生　産　性	0.707		0.570			
S	同　一　性	0.753	0.365		-0.370		
	親　密　性	0.826	-0.288			-0.299	
	抑うつ性(D)						0.899
	回　帰　性(C)		-0.400			0.438	
	劣　等　感(I)		-0.953				
Y	神　経　質(N)		-0.536	0.291		0.303	
G	主　観　性(O)						0.673
性	非協調性(Co)	-0.526				0.462	
格	攻　撃　性(Ag)				0.451	0.584	
検	一般的活動性(G)				0.703		
査	のんきさ(R)			-0.569	0.444	0.503	
	思考的外向性(T)			-0.812			
	支　配　性(A)				0.826		
	社会的外向性(S)				0.872		

表3　因子間相関

因　子	適応的自我感	独自的自我感	積極的自我感	内省的自我感	社会不適応性	空想性
適応的自我感	1.000	0.576	0.702	-0.384	-0.294	-0.688
独自的自我感	0.576	1.000	0.543	-0.308	-0.408	-0.686
積極的自我感	0.702	0.543	1.000	-0.229	-0.046	-0.431
内省的自我感	-0.384	-0.308	-0.229	1.000	0.385	0.385
社会不適応性	-0.294	-0.408	-0.046	0.385	1.000	0.587
空　想　性	-0.688	-0.686	-0.431	0.574	0.587	1.000

性格検査の主に情緒性に関する特性と情緒安定の方向で比較的高い相関をもち，② 自律性も基本的信頼感と同様である。③ 自主性はYG性格検査の主に外向性に関する特性と比較的高い正の相関をもつ。④ 同一性は基本的信頼感，自律性と同様に情緒性に関する特性と情緒安定の方向で比較的高い相関をもつ。⑤ 親密性は空想性（D），主観性（O），非協調性（Co）と比較的高い負の相関をもつが，⑥生産性はYGの一般的活動性（G），支配性（A），社会的外向性（S）とやや低いが正の相関をしめす。これらはあくまでも表面的な相関関係の姿である。EPCS 6尺度，YG性格検査 12尺度の18変数間に機能する潜在変数（latent variable）に対する18尺度の構造的な関係を明らかにするために図1のモデルを検証した。図1の数値は標準化推定値である。図1の複雑さを避けるために表1，表3を作成した。

モデル適合度は，GFI=0.865，RMSEA=0.081である。モデルの複雑さを考慮するとき，本モデルの適合度は一応満足できるものと考える。

図1，表2および表3をもとに因子の解釈とEPCS各尺度の心理学的意味を検討する。

(1) 適応的自我感因子

この因子は，EPCSの基本的信頼感（0.840），同一性（0.753），親密性（0.826），生産性（0.707），YGの非協調性（−0.526）高い負荷量をもって構成される因子である。先述したように，EPCSの基本的信頼感は自己や自己が存在する社会に対する信頼感，同一性は，自己の斉一性，一貫性の感覚，自己に対する信頼，自己受容の感覚，親密性

は，対人関係の過程で生じる様々な変化にも自己を見失わない確立した自己の感覚や対人関係的による自我の傷つき，自己の見失いなどに対する不安がなく人と親密な関係をきづき，維持することができるといった自己感，生産性は勉強や仕事，物事に持続的な忍耐と努力を傾注することができ，それを達成したときの喜びの経験を伴う自己感である。他方，YG の非協調性尺度の測定内容は，その項目内容から自己や他者に対する不信感の程度である。たとえば，「自分はいつも運がわるい」「親友でもほんとうは信用することができない」「人は結局利欲のために働くのだと思う」などである。本因子には負の方向で負荷量を持つことから，自己や他者，社会に対して不信感が少なく，社会的な場面においても協調的であるという行動傾向である。因子の方向を逆にして考えるとより解りやすい。すなわち，信頼の感覚，生産性の感覚，同一性の感覚，親密性の感覚の乏しい個人は，不信感が強く，不満を持ちやすく，非協調的な性格特性的特徴を持つ。本因子はこれらの尺度に対して共通にその変動の原因になる特徴をもつ適応的自我感因子とよぶことにする。ここでいう適応的とは，依存的，従順的に他者に合わせていくといった表面的な適応ではなく，基本的信頼感，自己の斉一性，一貫性の感覚に根ざした個として主体的に他者や環境に適応していくといった本来的な意味での適応をいう。つまり，新しい経験を自己に取り込み，自己の自我感を損なわずに再構成する力としての適応力である。

(2) 自律的自我感因子

EPCS の自律性（0.785），同一性（0.365），自主性（0.239），親密性（−0.288），YG の劣等感（−0.953），神経質（−0.536），回帰性（−0.400）が負荷する因子である。

自律性は自己の人生や社会での適応過程において，自分自身で物事を認識し主体的に判断を行い，その自らの判断や行動に対する心理的なゆるぎなさの自己感である。自主性は社会的な場面で自分の考えや意見を積極的に発言したり，主体的に行動したり，物事に積極的に取組んだり，新しいことにも積極的に取り組んだりする自己感である。YG の劣等感は，自信の欠如，自己の過小評価から生じる主観的な劣等感情の易感性を表わす。自信の欠如，自己の過小評価は感情的な不適応感を抱かせる。 神経質はちょっとしたことや細かいことが気になって，それが悩みや不安，心配の種になりやすい特徴を示し，あれこれ気になって優柔不断になりやすいといった面もある。また，この特性は豊かな感受性や繊細さ，優しさと重なり合う。すなわち，細やかによく気がつく，人の気持ちがわかるといった側面を持ち合わせる。また，回帰性は感情の変化が引き起こされやすいかどうかという特性である。藤村（1983）は YG 性格検査の情緒性に関する特性のうち，回帰性，劣等感，神経質による因子を，情緒不安定的な人格的基盤を持つ情緒的過敏性とよんだ。自律的な自我感は情緒的過敏性がパーソナリティ構造的関係を有している。本因子は Erikson のいう健康なパーソナリティの方向に定義された因子であるが，因子の方向を逆転させるとより一層わかりやすい。すなわち，劣等感が強く，気分が変化しやすく，神経質な性格は恥・疑惑，同一性拡散の自我感を有する人格像を意味する。以上のことから本因子を自律的自我感因子とよぶことにする。

なお，親密性が−0.288 と少し弱いながらも負の方向で負荷を持つ。藤村（2008）は自律性の人格的機能として協調的自律性と非協調的自律性があると指摘したが，非協調的に機能する場合は非親密的な特徴をもつものとなる。本因子における親密性の負荷はこのような姿を示すものといえる。

(3) 内向的生産性因子

EPCS の生産性（0.570），YG の思考的外向性（−0.812），のんきさ（−0.569），神経質（0.291）が負荷する因子である。思考的外向性およびのんきさは YG 性格検査 12 尺度の因子分析では，安

定して非内省性因子として抽出される因子である（辻岡・藤村，1975a；藤村，1983）。この因子は辻他（1998）による5因子モデル質問紙法性格検査FFPI（Five Factor Personality Inventory）とYG性格検査との因子分析的研究においても，FFPIの勤勉性尺度とYG性格検査のこれら両尺度が思考的内向性の方向で1つの共通因子を構成した（藤村，1996）。また，藤村（2008）は，EPCSと和田（1996）のBig Fiveとの因子分析的研究において，EPCSの生産性がBig Fiveの勤勉性尺度と1つの因子を構成することを明らかにしている。

本因子は先の適応的自我感因子および自律的自我感因子とそれぞれ−0.383，−0.308の因子間相関をもつ。元来EPCS各尺度は互いに正の比較的高い相関を有し高次の一次元性を有している（藤村，2008）。したがって，EPCSの生産性が正の比較的大きな負荷を持つ本因子がこれらの2因子と負の因子間相関をもつことは注意を要する。生産性は先述のように勉強や仕事，物事に取り組む持続的な忍耐と努力を傾注することができ，それを達成したときの喜びの経験等に特徴づけられる自我感と定義される。一方，YGの思考的外向性は思考性における心的エネルギーが外に向かう傾向があるのか，内に向かうのかの特性である。本因子には思考的内向性の方向で負荷し，物事を深く考え，計画的，熟慮的，内省的，瞑想的な傾向を表す。本因子の生産性自我感は社会的脈絡を持たない方向性の性格特性要因と結びつきながら形成された個人の，心的エネルギーが内向きの方向にあるパーソナリティにおける生産性自我感といえる。以上の理由から本因子を内向的生産性因子とよぶ。

(4) 外向性特性因子

本因子は，EPCSの自主性（0.695），同一性（−0.370），YGの攻撃性（0.451），一般的活動性（0.703），のんきさ（0.444），支配性（0.826），社会的外向性（0.872）からなる。自主性は積極的，主体的な特徴を表す自我感である。同一性が負に関与している点については注意を要する。EPCS各尺度はErikson（1959）のいう健康なパーソナリティと外向的な傾向とは正の相関があるものと期待される。現に本因子と，第1因子の適応的自我感因子，第2因子の独自的自我感とそれぞれ0.702，0.543の因子間相関がある。本因子を構成するYG性格検査の攻撃性，一般的活動性，のんきさ，支配性，社会的外向性から成る因子は高次の外向性であり（辻岡，1968；辻岡・藤村，1975a），外向性とは心的エネルギーが外界に向かう傾向をいう。他方，自我同一性は，新しい経験を内在化する過程で自我を再構成しながらも自己の斉一性，一貫性を維持していく心の営みであるといえる（Erikson，1959；榎本編，2008；Kroger，2000）。この心の営み自体は内なる活動であるがゆえに，同一性を外向性・内向性という軸に照らし合わせれば内向性の方向で負荷するものといえる。以上のことから，本因子を外向性特性因子とよぶことにする。

(5) 社会不適応因子

EPCSの親密性（−0.299），YG性格検査の回帰性（0.438），神経質（0.303），非協調性（0.462），攻撃性（0.584）およびのんきさ（0.503）からなる因子である。非協調性は第1因子の項で述べたようにその内実的意味は自己や他者に対する不信感であり，攻撃性は個人を環境に向かわせるエネルギーの強さといえる。本因子では回帰性が同一次元に加わるが，回帰性は情緒的変化の起こりやすさであり，のんきさはその尺度項目から衝動的傾向の強さと解することができる。気分の変化が起こりやすく，自己や他者に不信感が強いがゆえに不満感をもち，これらがエネルギーとなって自己や他者に衝動的，攻撃的な行動が引き起こされるという構図を意味する。必然的にこのようなパーソナリティ構造は，孤立・孤独といった自我感と結びつくものと言える。したがって，本因子を社会不適応因子とよぶことにする。

表4　EPCS と TEG II との相関行列

	基本的信頼感	自律性	自主性	生産性	同一性	親密性	批判的な親	養育的な親	成　人	自由な子ども	順応した子ども
基本的信頼感	1.000	0.429	0.499	0.378	0.625	0.632	0.416	0.499	0.063	0.457	-0.311
自　律　性	0.429	1.000	0.565	0.292	0.562	0.217	0.445	0.2236	0.125	0.357	-0.740
自　主　性	0.499	0.565	1.000	0.427	0.461	0.424	0.671	0.373	0.290	0.603	-0.509
生　産　性	0.378	0.292	0.427	1.000	0.360	0.287	0.538	0.413	0.331	0.156	-0.319
同　一　性	0.625	0.562	0.461	0.360	1.000	0.515	0.417	0.297	0.078	0.365	-0.431
親　密　性	0.632	0.217	0.424	0.287	0.515	1.000	0.271	0.356	-0.060	0.373	-0.126
批判的な親	0.416	0.445	0.671	0.538	0.417	0.271	1.000	0.401	0.502	0.414	-0.432
養育的な親	0.499	0.236	0.373	0.413	0.297	0.356	0.401	1.000	0.189	0.417	-0.100
成　人	0.063	0.125	0.290	0.331	0.078	-0.060	0.502	0.189	1.000	0.035	-0.201
自由な子ども	0.457	0.357	0.603	0.156	0.365	0.373	0.414	0.417	0.035	1.000	-0.206
順応した子ども	-0.311	-0.740	-0.509	-0.319	-0.431	-0.126	-0.432	-0.100	-0.201	-0.206	1.000

(6) 空想性因子

YG 性格検査の抑うつ性 (0.899)，主観性 (0.673) のみから成る因子である。本因子は，辻岡・藤村 (1975a) により空想性と名付けられた因子で，先の情緒的過敏性 (C, I, N) とは比較的高い因子間相関を持ちながらも 1 次独立な因子である。この因子には EPCS は関与しないが他の 5 因子，適応的自我感因子と −0.688，独自的自我感因子と −0.686，外向性特性因子と −0.431，内向的生産性因子と 0.574，社会不適応性因子と 0.587 の因子間相関をもつ。

2. EPCS と TEG II との関連性

EPCS の 6 尺度，TEG II の 5 尺度間の相関行列は表 4 の通りである。

EPCS と TEG II の各尺度間の構造的な関係を図 2 のようにモデル化し，SEM により検証を行った。表 5 はモデル中の標準化推定値を表に示したものである。

モデル適合度は，GFI＝0.934　RMSEA＝0.074 であった。

図 2 および表 5 から因子を検討する。

(1) 適応的自我因子

EPCS の基本的信頼感 (0.884)，同一性 (0.539)，親密性 (0.720)，生産性 (0.275)，TEG II の養育的な親 (0.398)，成人 (−0.350) から成る因子である。EPCS のこれらの 4 尺度は，先の YG 性格検査との確認的因子分析においても適応的自我感因子を構成した尺度であり，TEG II との関係においては，これらの尺度群と養育的な親，成人が結合した構図である。自己および他者，自己が存在する世界に対する信頼感，自己の斉一性，一貫性の感覚，しっかりした自己の感覚に根ざした他者との親密な関係の形成，維持の感覚および課題達成への忍耐と努力の感覚と他者へのいたわりや共感性といった養育的な親の自我状態と，客観的，論理的で理性的な自我状態である成人が対峙する関係を示す因子である。EPCS の上記 4 つの自己

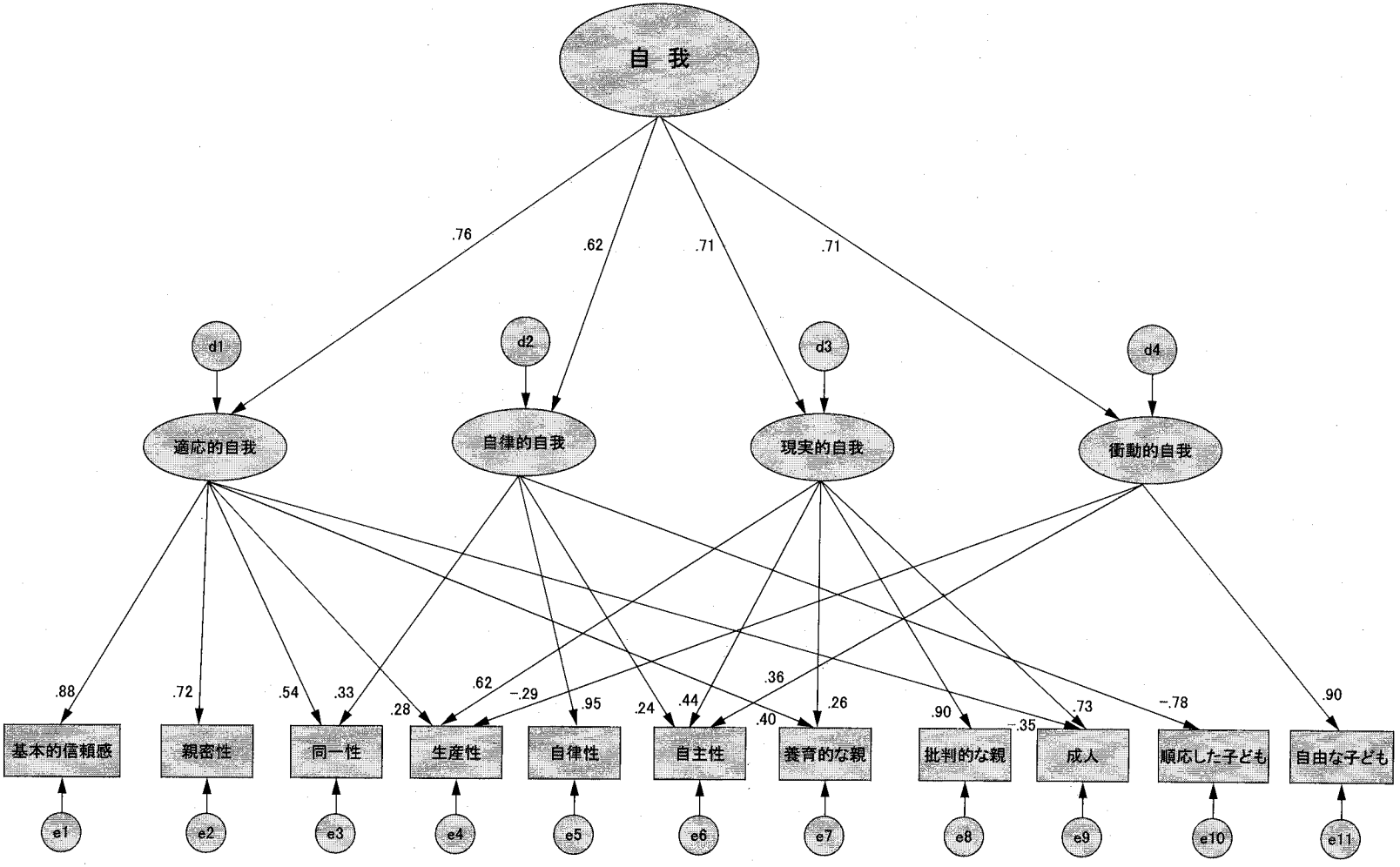

図 2　EPCS と TEG II との構造的関係

表5　EPCSとTEGⅡによる自我構造の確認的因子分析結果

		適応的自我	現実的自我	独自的自我	活動的自我
EPCS	基本的信頼感	0.880			
	自律性			0.928	
	自主性		0.420	0.245	0.372
	生産性	0.308	0.609		-0.303
	同一性	0.535		0.345	
	親密性	0.724			
TEGⅡ	批判的な親		0.907		
	養育的な親	0.411	0.253		
	成　人	-0.330	0.710		
	自由な子ども				0.893
	順応した子ども			-0.799	

感は，他者への思いやり，共感といった情緒性が伴うことを意味する。このような性質は客観的，論理的といった思考機能とは負の関係がある。ここでは先のEPCSとYG性格検査の関連性の研究との整合性から本因子を適応的自我の因子とよぶことにする。

(2) 自律的自我因子

本因子は，EPCSの自律性（0.949），自主性（0.240），同一性（0.334），TEGⅡの順応した子ども（-0.781）から成る。係数の大きさから自律性，順応した子どもが主になる因子と考えられるが，自己の人生や社会での適応過程において，主体的に物事の認識，判断，行動を行い，それらに対する心理的なゆるぎなさの自己感は自我同一的であり，従順，依存的，主体性の欠如ないしは弱さ，自己否定的な自我状態とは対極にあることを示す因子で，ここでは自律的自我因子と呼ぶことにする。

(3) 現実的自我因子

本因子は，EPCSの自主性（0.439），生産性（0.617），TEGⅡの批判的な親（0.898），成人（0.732），養育的な親（0.261）からなる因子である。主体的，積極的な自我感，課題達成への真摯な忍耐と努力の自我感，高い目標，理想の追求や責任感，リーダーシップという自我状態，客観的，論理的な成人の自我状態を意味する因子で，ここでは現実的自我の因子とよぶことにする。

(4) 衝動的自我因子

本因子はEPCSの自主性（0.355），生産性（-0.286），TEGⅡの自由なこども（0.904）からなる。感情や欲求を自由に表現し，本能的で自己中心的な自我状態で，課題達成への忍耐と努力，達成の喜びの経験を伴わない，社会化されていない積極性，主体性といった自我感を形成していることを表す因子で，衝動的自我の因子と呼ぶことにする。

これらの4因子は2次因子である自我因子にそれぞれ0.713，0.762，0.623，0.710の係数を持つ。

EPCSとTEGⅡの11尺度間の因子構造的関連性から4つの機能的な構造的関連性を持ちながら，統合された自我としてパーソナリティを特徴づけるものと考えられる。

【考　察】

EPCSの6つの尺度，すなわち基本的信頼感，自律性，自主性，生産性，同一性および親密性の各尺度の人格的機能を明らかにするために，性格特性検査であるYG性格検査12尺度，エゴグラムとして東大式エゴグラム（TEGⅡ）5尺度との因子構造的な関係を求めた。2つの分析から明らかになったEPCS各尺度が担うパーソナリティ機能を以下に論じる。

基本的信頼感尺度は両分析においてEPCSの同一性，親密性，生産性と因子を構成する。YG性格検査との分析では，非協調性（Co）が負に関与する。Coは先述したように不信感がその本体であり，不信感のなさとして関与する。TEGⅡとの関連では，養育的な親が正，成人が負に関与する。他者へのいたわりや共感といった社会的情緒性を帯びた自我感であるといえる。本尺度は自己や他者および自己が存在する世界への信頼と社会的情緒性を帯びた自我感を表すといえる。

自律性尺度は両分析においてEPCSの自主性，同一性と独自的自我感因子を構成することから，

自己の斉一性，一貫性および積極性，主体性があって成り立つ自我感といえる。YG 性格検査の情緒的過敏性に関する特性と TEG II の順応した子どもが負の方向で結びつく。つまり情緒不安定に基づく劣等感，神経質さ，気分の変わり易さがない性格特性，主体的，自立，独立的である自我状態と一体である。本尺度は，自己の斉一性，一貫性と一体をなし，情緒不安定性を基盤とする情緒的過敏性，すなわち劣等感，気分変化，神経質傾向の強さといわば表裏一体をなすパーソナリティ的特徴を示す尺度である。

自主性尺度は YG 性格検査との分析では外向性特性因子，独自的自我感因子に負荷し，また，TEG II との分析においては，現実的自我因子，独自的自我因子，衝動的自我因子に負荷する。以上のことから，本尺度は，独自的・自律的で外向的な心理的機能を持つ自我感といえる。

生産性尺度は，YG 性格検査との分析において適応的自我感因子と内向的生産性因子の両方に負荷する。この 2 因子は −0.383 の因子間相関をもつ。適応的自我感因子は生産性尺度の他に EPCS の基本的信頼感，同一性，親密性と YG 性格検査の非協調性（不信感）尺度からなる。また，TEG II との分析においては，生産性尺度は適応的自我因子，現実的自我因子，衝動的自我因子に負荷する。YG 性格検査との適応的自我感因子，TEG II 適応的自我因子，現実的自我因子は社会的性質を持つのに対して，YG 性格検査との内向的生産性因子は個人の生産的満足を表し，個人的な満足で完結するといった性質をもつ。以上のことから，生産性尺度において個人が社会的性質を有するか，個人内の生産的満足にとどまるのかは，Erikson がいう人生周期における心理・社会的危機の過程において内在化された経験の内実や気質の在り方によるものといえる。

同一性尺度は，YG 性格検査との分析において適応的自我感因子，自律的自我感因子に正に，外向性特性因子に負に負荷し，TEG II との分析においては適応的自我因子，自律的自我因子に正に負荷する。外向性特性因子に負に負荷することについては先述のとおりである。自己の斉一性，一貫性はパーソナリティの適応的，自律的な在り方の重要な要因である。

親密性尺度は，YG 性格検査との分析においては適応的自我感因子に正，自律的自我感因子，社会不適応因子に負に負荷し，TEG II との分析においては適応的自我因子に正に負荷する。親密性は，しっかりとした自我に根ざした適応的な機能と劣等感や情動的変化の起こりやすさなどの情緒的過敏性による依存，従順といったパーソナリティ機能があるといえる。

本研究で EPCS の 6 尺度と YG 性格検査 12 尺度の計 18 尺度間の確認的因子分析，TEG II との 11 尺度間の確認的因子分析の結果から得られた知見の検討を行った。いま表に現れた性質を相とよぶなら，自我感，性格特性，自我状態はそれぞれパーソナリティにおける相と見做すことができる。構成概念としては自我感と性格特性，自我状態は異なる概念であるが，個人のパーソナリティ内においては，これらの相の間に高い垣根があるわけではなく，それぞれの相の要素が糾わる縄のように互いに密接に関係しながらパーソナリティとして統合されているものと考えられる。

【引 用 文 献】

Campbell, D. T., & Fiske, D. W. (1959). Convergent and discriminant validation by the multitrait-multimethod matrix. *Psychological Bulletin*, 56, 81-105.

Dusay, J. M. (1977). *EGOGRAMS: How I See You and See Me.* Harper & Row Publishers. (池見酉次郎監修，新里里春訳 (1980). エゴグラム：一目でわかる性格診断　創元社)。

榎本博明編 (2008). 生涯発達心理学へのアプローチ　北大路書房。

Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle.* International University Press. (小此木啓吾編訳

1973　自我同一性　誠信書房)。
Eysenck, H. J., Eysenck, S. B. G. (1969). *Personality Structure and Measurement.* London Routledge and Kegan Paul.
藤村和久 (1983). 性格特性と自己の性格評価の構造的連関について　大阪樟蔭女子大学論集, 20, 225-236。
藤村和久 (1996). 性格特性理論における5因子モデルについて　－YG性格検査との因子構造的関連性－　大阪樟蔭女子大学論集, 33, 229-243。
藤村和久 (2004). グループ主軸法による相関性の高い行動特性の測定尺度の構成　－Erikson のパーソナリティ構成要素の尺度の構成－　大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 107-117。
藤村和久 (2008). エリクソンのパーソナリティ構成要素の測定尺度 (EPCS) の構成　－人生周期における基本的信頼感から親密性－　大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 7, 149-161。
藤村和久 (2009). エリクソンのパーソンリティ構成要素測定尺度 (EPCS) の同質性と信頼性の確証　－構造方程式モデリングを用いて－。大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 8, 211-220。
Hyer, N. R. (1979). Development of a Questionnaire to Measure Ego States with Some Applications to Social and Comparative Psychiatry. *Transactional Analysis Journal*, 9, 9-19.
岩井浩一他 (1977). 質問紙法エゴグラムの臨床的応用　交流分析研究, 12, 3-13。
柏木繁男 (1997). 性格の評価と表現　－特性5因子からのアプローチ－　有斐閣。
Kroger, J. (2000). *Identity Development; Adolescence through Adulthood.* Sage Publications. (榎本博明編訳 (2005). アイデンティティの発達　青年期から成人期　北大路書房)
宮下一博 (1987). Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討　教育心理学研究, 36, 263-268。
中西信男・佐方哲彦 (1983). 青年期における同一性の発達　－エリクソンの心理社会的段階目録 (EPSE) の改訂　関西青年心理研究会, 5-21。
Rasmussen, J. E. (1964). Relationship of Ego Identity to Psychological Effectiveness. *Psychological Reports*, 15, 815-826.
Rosenthal D. A., Gurney R. M., and Moore, S. M. (1981). From Trust to Intimacy: A New Inventory For Examining Erikson's Stage of Psychological Development. *Journal of Youth and Adolescence*, 10, 526-537.
杉田峰康他 (19979). 新しいエゴグラム・チェックリスト (ECL) について　交流分析研究, 4, 28-40。
辻　平治郎編 (1998). 5因子性格検査の理論と実際　－こころをはかる5つのものさし－。北大路書房。
辻岡美延 (1968). 新性格検査法　－Y-G性格検査実施・応用・研究手引き－　竹井機器工業株式会社。
辻岡美延・藤村和久 (1975a). 質問紙法性格検査における社会的望ましさの因子について　教育心理学研究, 23, 69-77。
辻岡美延・藤村和久 (1975b). 質問紙法性格検査における社会的望ましさの因子の除去について　関西大学社会学部紀要, 6, 11-26。
辻岡美延・藤村和久 (1975c). 社会的望ましさの因子の混入しない質問紙法性格検査の構成　－因子得点判定法について－　教育心理学研究, 23, 206-212。
辻岡美延・藤村和久 (1976). YG性格検査プロフィールの分解と合成　－因子分析モデルによる反応歪曲の検出－　教育心理学研究, 24, 8-16。
東京大学医学部心療内科 TEG 研究会編 (2006). 新版 TEG II　－解説とエゴグラムパターン　金子書房。
和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成　心理学研究, 67, 61-67。

The Relationships between the Erikson's Personality Component Scales and Personality Trait, and Egograms

—— By the Confirmatory Factor Analysis between the EPCS and the YG Personality Inventory, and the TEG II ——

Osaka Shoin Women's University
Kazuhisa FUJIMURA

ABSTRACT

The purpose of this study is to certify that each scale of the EPCS (Erikson's Personality Component Scale; Fujimura, 2008, 2009) has psycho-social characteristics as has been defined by Erikson. Through clarifying the factor structural relations between the EPCS and the YG Personality Inventory, and TEG II by the structural equation modeling, the personality functional characteristic of each scale of the EPCS is confirmed. Consequently, it's can be said that each scale the EPCS has construct validity.

In this study, it is proved that Erikson's sense of ego has a personality structural relation with emotionality.

Keywords: Erikson, personality, egogram, YG personality test, structural equation modeling